

氏名・(本籍地)	佐々木 大 樹 (北海道)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	甲第45号
学位授与の日付	平成20年3月15日
学位論文題目	<b>仏頂尊勝陀羅尼の研究</b>
論文審査委員	主査 高橋 尚夫 副査 福田 亮成 副査 苫米地 誠一

## 佐々木 大 樹 氏 学位請求論文審査報告書

### 「仏頂尊勝陀羅尼の研究」

#### 論文の内容の要旨

佐々木氏の学位請求論文は、インド中期密教経典であり、日本の真言密教の所依とされる『大日経』や『金剛頂経』の成立する直前の時期に位置すると考えられる仏頂尊関係の密教経軌の中で、インド・中国・日本と広範囲にわたって、庶民層にまで広く信仰された仏頂尊勝陀羅尼についての研究である。仏頂尊は仏の肉髻を象徴する仏の知慧を尊格化したものと考えられるが、尊勝仏頂のみではなく、金輪仏頂や白傘蓋仏頂など、多くの種類の仏頂尊を成立させてきた。その中で仏頂尊勝陀羅尼は、尊勝仏頂の陀羅尼として最も広範囲に信仰された陀羅尼である。

仏頂尊の関わる密教については、既に三崎良周博士の『台密の研究』所収の緒論による漢訳経軌に基づく中国密教における展開の問題などが論じられている。筆者自身が述べるように、当初は仏頂系密教の全般について、その成立・発展・展開の過程を明らかにすることを目的としたが、本論文では、その一部である仏頂尊勝陀羅尼に限定して論じられている。またこの仏頂尊勝陀羅尼については、既に干潟竜祥博士の「仏頂尊勝陀羅尼経諸伝の研究」による尊勝陀羅尼類本の分類研究などがあるが、本論文ではそれら先行研究を踏まえながら、それらは陀羅尼のみに研究が集中していて、経軌としての展開の問題や周囲の信仰の問題などに到っていないと批判し、自らの研究を幅広い視点から仏頂尊勝陀羅尼の全容に迫るものと位置づけている。

本博士論文の本論は、全3章より構成されている。その内訳は、第1章が資料論、第2章が文献学的な考証、第3章が歴史的な考証となっている。

第1章「『仏頂尊勝陀羅尼』の資料」は、本論で扱われる資料の概要に付いて、資料論として一章が設けられている。まず第1節「『仏頂尊勝陀羅尼』の梵蔵漢資料」では、全四項に分けてサンスクリット・梵字資料、チベット訳資料、漢訳資料、敦煌写本等の一次資料について整理し、第2節「『仏頂尊勝陀羅尼』の先行研究」では、当陀羅尼に関わる先行研究を涉獵して、各研究に対する著者の見解・評価を加えている。

第2章「『仏頂尊勝陀羅尼』の文献学的考察」では、経典12種類、儀軌11種類、陀羅尼29種類を中心

に陀羅尼本文の文献学的な研究を展開している。第1節「『仏頂尊勝陀羅尼經』の対照比較」では、初期型と後期型の各々の經典の特質を整理するとともに、經典の変遷の問題を明らかにし、また『仏頂尊勝陀羅尼經』の周辺に存在する類本資料についても触れている。第2節「『尊勝儀軌』の対照研究」では、漢訳儀軌諸本同士の関係性や『Sādhnamālā』所説の觀想法・画像法について整理し、『仏頂尊勝陀羅尼經』の儀軌化の問題について解明している。第3章「『仏頂尊勝陀羅尼』の対照研究」では、29種類の陀羅尼本文を比較対照し、増広の次第を明らかにするとともに、干潟説を継承・発展させながら、甲類（短い陀羅尼）・乙類（長い陀羅尼）等をもって陀羅尼の類型化を試みている。

第3章「『仏頂尊勝陀羅尼』の歴史的考察」では、経録・経序等の史料26種類を中心に、仏頂尊勝陀羅尼の中国受容の問題について考察している。第1節「『仏頂尊勝陀羅尼』の中国受容の研究」では、仏陀波利将来の『仏頂尊勝陀羅尼經』から如何に諸訳が成立したのか、また不空と仏頂尊勝陀羅尼の関係について、中国の記録・伝承を整理し、仏頂尊勝陀羅尼が中国で流布した背景としての五台山の文殊信仰について言及している。第2節「『仏頂尊勝陀羅尼』の成立と展開」では、前節での伝承の整理と、文献学的な考証を組み合わせて、歴史の実像を解明する試論を提出している。すなわち、仏陀波利将来本をめぐる同本異訳の問題、善無畏・金剛智訳と伝承される陀羅尼の問題等について新説を提示している。第3節「『仏頂尊勝陀羅尼經幢』の研究」では、中国で独自に展開した石造の經幢の一種である「仏頂尊勝陀羅尼經幢」について論じ、特に經典や儀軌等の所説が、如何に建幢に影響を与えたのかを明らかにしている。

## 審査結果の要旨

最後に「資料編」として、本論文で扱った梵蔵漢の諸資料について、梵文資料については広本の陀羅尼を写本から翻刻して和訳を付し、また『Sādhnamālā』所収の儀軌については、梵文とともに蔵訳資料と和訳を付している。また蔵訳儀軌について和訳を載せ、更に敦厚写本の翻刻を加えている。

本論文では、関係する資料を、サンスクリット語・チベット語訳・漢訳（中国語訳）資料の中に涉猟し、入手しうる限りの文献・写本を収集して、その本文を解読し、種々な異本類を整理して、その成立・発展の過程を明らかにすることを目指している。その分類・整理は、先学の研究に依りながらも、新たな資料を加え、細部の分類において独自性を発揮している。また尊勝仏頂の儀軌については、漢訳と蔵訳の夫々について異本を対照し、また蔵訳諸本に見られる尊勝仏頂母の図像を検討し、陀羅尼本文についても、諸種の異本を対照してその内容を解読している。また仏頂尊勝陀羅尼の信仰については、中国における仏陀波利と五台山信仰について述べ、五台山と不空三蔵との関係に及んでいる。また中国における石造の經幢について、尊勝經幢の成立と流布について検討している。この中国における仏頂尊勝陀羅尼と尊勝經幢については平成15年に開催された国際天台学会における郭麗英氏の発表「仏頂尊勝陀羅尼的伝播興儀軌」があったが、その掲載された『天台学報』特別号の出版が当論文の提出後であったため、参照されていないことは残念であった。

しかしながら本研究は梵蔵漢にわたる広範な資料を駆使しての浩瀚な論文であり、梵蔵の資料の扱いにおいて、

1. 陀羅尼自体の資料は、漢字・チベットの音写語を梵文資料として含めれば29種の多くにわたり、その全ての資料を対照させ、陀羅尼の一句一句を検証していることは今までに無い功績であるといえよう。また、乙類の陀羅尼を写本から翻刻したことも賞賛に値する。
2. 陀羅尼とは別に、仏頂尊に関する成就法が存在する。現在の所、梵文に三種が知られており、すでに

刊本が出ている。それらとチベット訳を対照させたテキストを制作し、和訳を付しているが、惜しむらくは本論文審査中にその作業結果が発表された（森雅秀『『サーダナマーラー』「仏頂尊勝成就法」和訳およびテキスト』2007年12月）。しかし彼此比較すると双方に相補うところがあり、貴重な成果といえる。

3. チベット語に残る儀軌が五種類ある。これも資料として和訳を提示している。しかし、チベット文が省略されているので、翻訳の可否を確かめることが出来ない。出版の際にはチベット語のテキストを添付する必要があるであろう。
4. そのほか敦煌資料等も多く参照されており、資料に関しては漏らすことなく集めた感があり、申し分ないと言えるであろう。

また漢訳（漢字）資料の扱いにおいて、インドにおける本文展開の問題と、中国への伝来の問題とが、明瞭に述べられていない面が見受けられる。また仏陀波利や不空に関わる言及は、漢訳資料の本文研究の前提として承認されるが、逆に尊勝経幢に関する1節は、資料的な制約から、経幢に刻された陀羅尼本文を検討していないことが違和感を与え、中国における尊勝陀羅尼の信仰史という点では、僧伝や経録、文学作品などの検討がなされていない点に問題が残る。また取り扱った梵蔵漢の諸資料の全体像が明瞭ではなく、その中での各資料の位置付けが明確になっていない。

しかし漢字音写資料の陀羅尼本文の厳密な比較により、単純に中国での変容とされてきた陀羅尼の句の増加について、インドにおける増加、即ち陀羅尼の発展過程を推定し、それぞれに別箇の梵本の伝来してきた可能性を論じている点は、筆者の緻密な作業の結果に基づくものであり、貴重な成果といえる。

今後、論証の正鵠、信仰形態や実践的な面を加味していくことによって、課程博士論文としては秀逸な論文となるであろう。更には筆者は、当初、仏頂尊の密教の全体にわたる研究を志したところからも、今後の研究の中で仏頂尊全体の解明と、その中での仏頂尊勝陀羅尼の位置付けの明確化の果たされていくことが期待される。